

## アメリカおよびオランダにおける インドネシア研究の現況

永 積 昭

### I

欧米における東南アジア研究については、1961年に一橋大学教授板垣与一氏が「欧米の東南アジア研究」と題する報告を、アジア経済研究所の委託研究として発表しておられる。また京都大学の東南アジア研究センター発足に際しても、詳細な報告書が作成されているので、それらと重複するのを避けて、ここではだいたい1961年以後現在（67年10月）までの、アメリカおよびオランダにおけるインドネシア研究について、わたくしの狭い見聞を語ることにする。

1961年9月にアメリカに渡ったわたくしは、西部、中部を割愛して、ただちに東部ニューヨーク州イサカ市のコーネル大学に行き、ここに合計3年半滞在してインドネシア近代史の研究に従事した。その間に64年夏、イエール大学においてインドネシア語夏期講座に10週間出席しただけで、他の大学で学ぶ機会がなかったので、視野は自然この両大学に限られる。両大学はアメリカの東南アジア研究において最も古い歴史を誇り、イエールはどちらかといえば東南アジア大陸部、コーネルは島嶼部に力を注いでいる。イエール大学のインドネシア専攻学者は、歴史学のベンダ（Harry J. Benda）と言語学のダイアン（Isidore Dyan）くらいであろう。ベンダは日本軍占領時代の経験をいかして「三日月と昇る

日」（Harry J. Benda, *The Crescent and the Rising Sun*. The Hague & Bandung, 1958）を書いたが、現在は次第に19世紀以来のインドネシア社会構造や、ひろく東南アジア全体の民族主義運動などに、幅広い関心を示している。イエール大学図書館にもインドネシア関係の図書は相当数収められているが、コーネルの収集ほどではない。イエール付属のHRAF（Human Relations Area Files）から1964年にSurvey of World Culturesのシリーズの1巻として、マクヴェイ女史（Ruth T. McVey）の編纂した「インドネシア」が刊行されたことは斯学の発展のために喜ぶたい。これはインドネシアの政治・経済・歴史・文化などに関する20～30ページ程度の解説をそれぞれアメリカの一流専門家達が執筆したものである。その他にも時々インドネシアに関するモノグラフがイエールの東南アジア・スタディーズから出版され、66年には「東南アジアと第二次世界大戦」が世に出た。これは四つの論文を含み、そのうちアンダースンの論文は日本のインドネシア軍政に関するものである。（Benedict R. O'G. Anderson, "Japan: 'The Light of Asia,'" Josef Silverstein, ed., *Southeast Asia in World War II: Four Essays*. Monograph Series No. 7; New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University, 1966. pp. 13-50.) しかし、

概して研究活動はそれほど活発ではなく、大学院学生の中でもインドネシア専攻の者は比較的少ない。

コーネル大学の東南アジア・プログラムは1950年に開設され、国防および教育法 (National Defense and Education Act 略称 NDEA) による国家の補助やロックフェラー、フォード、カーネギーなどの諸財団からのグラントを得てさかんな活動を行なっている。ことに1957年以後、近代インドネシア・プロジェクト (Modern Indonesia Project) が発足し、主としてフォード財団からのグラントを受けて、図書収集、業績の出版、現地研究の補助、教授の招聘などの諸事業を行なっている。図書の収集については、イェール、コーネル等いくつかの大学がアメリカ国会図書館から東南アジアのそれぞれの地域について図書収集の責任を負わされているが、コーネルはインドネシアの近刊図書を収集する義務を負っている。これはいうまでもなく過去の実績によるもので、単一の機関としてこれに匹敵するインドネシア関係文献の収集は、アメリカはもちろん、インドネシアにもオランダにもない。ことに第二次大戦以後の部分は世界一といえるが、オランダ植民地時代のものもかなりよく集められている。

東南アジア・プログラムの教授陣は非常に多数に上るが、そのうち、インドネシアおよびマレーシア関係の専門家は現在次の通りである。

政治学	George McT. Kahin Benedict R. O'G. Anderson
言語学	John M. Echols John U. Wolff
文化人類学	James T. Siegel
歴史学	Oliver W. Wolters
美術史	Stanley J. O'Connor

なおコーネル大学は62年4月以後、ロンドン

大学の the School of Oriental and African Studies および the London School of Economics and Political Science と提携し、いわゆるコーネル・ロンドン・プロジェクトを推進しており、毎年互いに1人ずつ交換教授として出講することになっている。インドネシア関係では歴史学のウォルタース教授が現在ロンドンで教えている。またこのプロジェクト以外にも、毎年少なくとも1人の教授を招いており、67年秋学期にはサラワク博物館長の Tom Harrisson が東南アジア島嶼部の考古学を講じている。以上、いちおうインドネシアを専攻する教授達の名を列挙したが、アメリカの大学の特色として必ずしもある地域や学問分野にこだわることなく、セミナーの席上や個人的な接触の機会に、常に活発な意見の交換を行なっている点は大いに学ぶべきであろう。彼らの研究成果は多くの場合、Cornell University Press から出版されており、ケーヒン教授の主著「インドネシアにおけるナショナリズムと革命」などはその初期の成果であるが、同じく彼が編集した「東南アジアの政府と政治」は64年に改訂版が出た。61年刊行のエコルズ・シャディリ共著の「インドネシア=英語辞典」も63年に増補改訂されている。これらの書名についての詳細は板垣氏の前掲書、または拙稿「コーネル大学アジア研究学部」(『アジア経済』3巻10号 pp. 74-75) を参照されたい。その他最近数年間に出版されたものを下に掲げる。

- (1) Herbert Feith, *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*. Ithaca, 1962.
- (2) Selosoemardjan, *Social Change in Jokjakarta*. Ithaca, 1962.
- (3) Ruth T. McVey, *The Rise of Indonesian Communism*. Ithaca, 1965.
- (4) George McT. Kahin & Soedjatmoko, ed., *Introduction to Indonesian Histo-*

*riography*. Ithaca, 1964.

(5) O. W. Wolters, *Early Indonesian Commerce: A Study of the Origins of Śrīvijaya*. Ithaca, 1967.

(6) Koentjaraningrat, *Villages in Indonesia*. Ithaca, 1967.

その大部分はコーネル大学に提出した学位論文に加筆訂正したもので、(3)はインドネシア共産党成立の背景から1926～1927年のクーデター失敗に至るまでの歴史を、国際共産主義運動の動向との関連において克明に跡づけた力作、また(1)はインドネシア共和国成立以後、スカルノの「指導された民主主義」に至る政治過程の研究であって、いずれもケーヒンの労作をいっそう掘り下げたものということが出来る。その他、学生の学位論文やターム・ペーパー、書目および英語以外の重要文書の翻訳は、

(1) Southeast Asia Program Data Papers

(2) Modern Indonesia Project Papers

a. Interim Report Series

b. Monograph Series

c. Translation Series

の各種に分けて、東南アジア・プログラムで謄写印刷されている。煩雑になるので一々書名を挙げないが、極めてすぐれた論文もこの中に含まれ、学生達の研究活動を一番よく示しているのはこの四つのシリーズであるように思われる。なお65年以来、同じく謄写印刷で *Indonesia* という雑誌が年2回発行されるようになり、純粋の学術論文の他に、多少随筆風のものや、現地研究のノートなどを載せている。

東南アジア・プログラムの在籍学生数は80人くらいで、数年前に比して増減はなく、単一地域としてはインドネシア専攻の者が圧倒的に多い。専門学科別では政治学が多く、それも第二次大戦中から現在に至る時期の研究者が大部分であり、文化人類学がこれに次ぎ、

歴史学は非常に少なく、特に19世紀以前を研究する者はほとんどいない。従って文献による研究とともにインタビューによる情報収集に重きをおくのは当然であり、学位論文執筆の前にフォード財団、コーネル・ロンドン・プロジェクト等から研究補助金を得て、少なくとも1年現地研究を行なうのが例となっている。

現地研究のための入国が、その時々々の政治情勢によって左右されることは当然とはいいながら、アメリカ人学生のインドネシア入国ほど短期間に大きな変化を経験した例は少ないであろう。62年のオランダ・インドネシア両国間の紛争終結後、マレーシア連邦結成に当たってスカルノ前大統領がこれを新植民地主義と断じ、対決政策を採ったことから、アメリカ人学生の入国は極度に困難となり、64年頃から65年の9.30クーデター前後までの間は新規入国はほとんど不可能であった。スカルノ失脚後その制限は次第に緩和され、67年3月のスハルト声明を経て、現在ではアメリカ人の入国はむしろ62年以前よりいっそう容易のように見受けられる。この間にあって、スカルノ＝スバンドリオ路線に比較的理解のあったコーネルの学生達は、クーデター直前の頃にも他のアメリカの大学生に比して入国が容易であったが、今度の政権交代後はかえって微妙な立場にあるとの見方もある。事の当否は別として、コーネルの現地研究者達が、アメリカの地域研究の陥りがちな欠点を排して、なるべく現地社会にとけ込もうと努力していることは高く評価されてよい。これを目して単なるセンチメンタリズムとするのはアメリカのみならず、ひろく世界のインドネシア研究にとって不幸であろう。

## II

オランダ滞在は1964年7月からほぼ2年間であったが、特定の大学や研究所に籍を置か

ずに、もっぱらコーネル大学に提出する論文のための史料採集につとめた。概して1945年以後のインドネシアを研究するための資料はアメリカのほうが豊富であるが、それ以前の、ことに政府の公文書についていえば、当然オランダのほうが圧倒的に多い。従ってこの場合、研究者について述べるより先に史料の所在に触れるのが順序であろう。(史学雑誌第76編第7号所載の拙稿「オランダの文書館」の中でも文書の性質や分類について述べているので、詳しくはそれを参照されたい。)

だいたいにおいて、植民地関係のオランダ公文書は、年代に即して三つの場所に収蔵されている。即ち(1)16世紀末のオランダ東洋進出初期から1850年頃までの分は、ハーグの国立中央文書館('t algemeen Rijksarchief)に、(2)1850年頃から1900年頃までの分はオランダ中央部の小さな村、スハールスベルヘン(Schaarsbergen)にある国立文書館分室に、(3)1900年以後の文書は、ハーグのオランダ内務省の文書室にある。(2)だけが人里離れた不便な場所にあるが、これは中央文書館の文書が増加の一途をたどり、収納場所が不足したための応急措置である。(3)は1959年の植民省解体とともに、そのまま内務省に移管されて現在に至っているもので、翌60年頃から整理に着手し、わずか四、五年前から閲覧が可能となった。他の二つと異なり閲覧には許可を必要とするが、現在の政治情勢に大きな影響を及ぼし得るような文書は別として、往年の秘密文書に至るまで見ることが出来る。とくに官庁文書(Departementsarchief)と呼ばれる一連の文書は1900年から1959年に至る歴代東インド総督からオランダ植民大臣への年次報告より成り、またインドネシア各地域からの報告をそのまま収録している場合が多いので、はなはだ貴重な根本史料である。ただ残念なことに索引が極めて不備であり、この膨大な文書を利用するには、あらかじめ

研究主題を相当限定しておく必要がある。これ以前の文書、特に前述の(1)については、今まで日本人の研究者によってしばしば紹介され、特に岩生成一氏の「オランダ東インド会社の日本貿易史料」(『社会経済史学』15巻1号 pp. 100-134)が最も詳しいので、ここでは割愛する。

内務省所蔵文書以外のまとまった公文書収集といえば、アムステルダム王立熱帯研究所(Koninklijk Instituut voor de Tropen)の参考課(Handboekerij)には、オランダ人の地方長官たる Resident および Assistant-Resident が退任時に記した覚え書(Memorie van Overgave)が相当数収められている。このうち一部は内務省所蔵のものと重複するが、相補うものも多い。

さて、これまで述べたのは公文書であるが、個人文書のコレクションは公開のものだけでも枚挙に暇がない。例えば国立中央文書館には、1910年代の植民大臣 プレイテ(Th. B. Pleijte)や同じ頃の東インド総督ファン・リンブルフ・スティルム(J. P. van Limburg Stirum)の授受した書簡類が収められており、ハーグのドクトル・カイペル財団(Doktor Kuyper Stichting)には、やはり今世紀初頭に総理大臣の職にあったカイペル(A. Kuyper)自身や、東インド総督、植民大臣等を歴任したイーデンプルフ(A. F. Idenburg)の私信類がたんねんに保管されている。

また、同じくハーグにあったが現在はライデンに移転した王立言語地理民族研究所(Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land- en Volkenkunde)には、1920年代に原住民関係顧問官(Adviseur voor de Inlandsche Zaken)であったケルン(R. Kern)およびホベー(E. Gobée)が執筆、受領、または収集した各種文書があり、20世紀のインドネシア関係史料の宝庫ということが出来る。

このように、未刊の公文書、私文書利用の

道が開けているが、既に刊行済の史料集についても言及しなければならない。もともとオランダの学者は史料集刊行に関心が深く、既に19世紀後半から、「東インドにおけるオランダ支配の起源」、「オランダ領インド法令集」、「バタビヤ城日誌」など膨大な史料集が刊行されている。(これらについては岩生前掲論文に詳しい。)これらの史料集の大半は17世紀に関するものであるが、20世紀の既刊史料としては、道德政策の余波を受けて、政府はしばしばインドネシア民衆の生活調査や、地方行政の実態調査などを行ない、毎年「植民地報告」(*Koloniaal Verslag*)を発表するなど、同時代の史料が急増してくる。1918年に設立され、1942年の日本軍進攻の直前まで存続した国民会議の議事録(*Handelingen Volksraad*)がある。以上の刊行史料は、アメリカでも例えばコーネル大学図書館にかなり集まっているが、やはりオランダのほうがいっそう豊富であり、なかでも前述の王立言語地理民族研究所とライデン大学図書館が双璧であろう。

最近の史料集刊行事業の中で見逃すことの出来ないのは、内務省に移管された旧植民省文書を整理して覆刻しようとする1962年以降の試みである。ユトレヒト歴史学会が、フェン・デル・ヴァル博士(S. L. van der Wal)に委託して、20世紀初頭以後1941年に至るオランダ東インド行政関係史料の編集を続けており、現在までに既に3冊が刊行されている。

S. L. van der Wal, ed., *Het onderwijsbeleid in Nederlands-Indië: 1900-1940*. Groningen, 1963. [Uitgaven van de Commissie voor Bronnenpublicatie betreffende de geschiedenis van Nederlands-Indië 1900-1942 van het Historisch Genootschap (gevestigd te Utrecht) No. 1.] *Id.*, *De Volksraad en de Staatkundige ontwikkeling van Nederlandsch-Indië: een bronne-*

*npublicatie*. 2 vols. Groningen, 1964-65. [Uitgaven... No. 2, No. 3]

ヴァル氏は外務省官吏で、もと植民地行政官僚の経歴を持ち、67年9月からコールハース氏(W. Ph. Coolhaas)の後を襲ってユトレヒト大学歴史学科教授となった人である。本来の計画によれば全部で4冊の史料集が刊行されて、67年末頃完了する予定で、第1冊は教育行政、第2冊と第3冊は国民会議(Volksraad)、未刊の第4冊はナショナリズム諸団体に関する文書を収録することになっている。文書の大半は前述の内務省所蔵のものであるが、その他個人所蔵文書も可能な限り目を通し、必要なものはことごとく収録しており、20世紀のインドネシア史研究にとって極めて有益な出版ということが出来る。

さて、これらの豊富な史料を利用して、オランダの学者達は、過去100年以上にわたり歴史学、文学、文化人類学、社会学等の分野に多くの業績を残してきた。インドネシア研究の場としては、最も古い伝統を誇るライデンと植民地行政の実際的必要と結びついて生まれたユトレヒトの両大学の関係学科、それに最近活動のめざましいアムステルダム大学を加えて三つの大学が挙げられよう。研究所もいくつかあり、まず前述のアムステルダムの王立熱帯研究所(これについては中村孝志氏の紹介が『アジア経済』2巻5号, pp. 70-71に載せられている)は、今までに集められた研究資料の維持に力を注ぎ、あまり新しい活動は行なっていないように見える。ハーグの社会問題研究所(Institute of Social Studies)は1952年に設立され、主として低開発地域の社会変動や経済発展などの実際的な解決策の研究のため、各国の大学院レベルの人々が留学している。セレベス社会調査などで知られるH. Th. Chabot教授もスタッフの1人ではあるが、とくにインドネシア地域研究に力を入れている機関ではない。

アムステルダム の社会史研究所 (Instituut voor de Sociale Geschiedenis) はオランダの社会主義者の著作および蔵書の収集で知られているが、これはヨーロッパが中心で、インドネシアに関しては J. E. Stokvis の数十冊に及ぶインドネシア新聞のスクラップブック以外には特に見るべきものがない。同市の戦争記録研究所 (Rijksinstituut voor Oorlogsdocumentatie) は本国およびインドネシアにおける第二次大戦関係文書を集めており、その主要部分が「日本占領下のオランダ領インド」(*Nederlandsch-Indië onder Japanse bezetting: 1942-1945*. Franeker, 1960.) として刊行された。これは戦争経過および占領政策についての貴重な史料集であるが、日本語やインドネシア語の原史料をオランダ語に翻訳したものが多いために、その史料価値はやや減ずるのが惜しまれる。

結局インドネシア研究者を数の上で最も多く擁しているのは、さきに述べた王立言語地理民族研究所であろう。この研究所の沿革と研究業績については中村孝志氏の詳細な紹介(「オランダの東南アジア研究」『東南アジア研究』2巻1号, pp. 94-106.) があるので、1964年頃以後の事情について簡単に述べたい。66年に、スマトラ言語の専門家フォルーフエ (P. Voorhoeve) が所長を辞し、セレベス諸言語を専攻するノールダイン (J. Noorduyn) がこれに代わった。世界的に有名な季刊の雑誌 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* は大分昔日の権威を失いながら現在も刊行されているが、言語学や文学の論文が多く、また必ずしもインドネシアのみを対象とするわけではない。しかし、極度に荒廃していたハーグの建物から、67年春ライデン大学文学部の新庁舎に移転したことにより、今後の清新な活動に期待することが出来そうに思われる。

結局わたくしは約7年の間隔をおいて2度オランダに滞在したことになるが、オランダのインドネシア研究はたしかに一つの転機を迎えているように思われる。1960年頃までは、中村氏の紹介にもあるごとく、オランダの学界を一種の虚脱状態が支配していた。しかしオランダとインドネシア両国間の懸案たる西イリアンの帰属が1966年に解決して以来、マレーシアとの対決政策の最中ですら、両国の間柄は急速に好転し、正常な外交関係が締結されるに至った。この間の政情の変転をよそに、多年の研鑽の成果を世に問うたメイリンク・ルーロフス女史の労作 M. A. P. Meilink-Roelofs, *Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago between 1500 and About 1630*. The Hague, 1962. が世に出たのも同じ62年である。従来植民史観にもあきたらず、またファン・ルール流のヨーロッパ人貿易の極端な過小評価 (J. C. van Leur, *Indonesian Trade and Society*. The Hague & Bandung, 1962.) にも承服し得ない著者が、最近利用可能となった諸史料を駆使して当時の貿易の大勢を実証したもので、将来長くこの分野における代表的業績の一つとなるであろう。

戦後20年以上を経た今日、オランダ植民地時代のインドネシアを知らない若い世代が、過去の植民史観に煩わされずにインドネシアの歴史や社会を研究するようになっていく事実は注目されてよい。なかでもアムステルダム大学の社会学教授ヴェルトヘイム (W. Wertheim) 氏を中心とする若い学者達の活動はめざましく、その1人であるインドネシア人サルトノ (Sartono Kartodirdjo) 氏の、19世紀のバンテンにおける農民反乱の研究は、王立言語地理民族研究所の *Verhandelingen* の1冊として66年に刊行された。氏は現在ジョクジャカルタのガジャ・マダ大学の歴史学科教授であり、この業績の発表は遂にインド

ネシア史も地方史の精密な研究の段階に入ったことを感じさせる。(Sartono Kartodirdjo, *The Peasants' Revolt of Banten in 1888—Its Conditions, Course and Sequel*. [Verhandelingen, Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land- en Volkenkunde.] The Hague: Martinus Nijhoff, 1966.)

その他ヴェルトヘイム氏の門下には、同じく19世紀インドネシア史を専攻する華僑の Thé Siau Giak 氏や、インドネシア共産党の前身たる I. S. D. V. (東インド社会民主主義協会) についての研究を進めている社会史研究所勤務の Tichelman 氏など、インドネシア研究の若い学徒は次第に増しつつあり、その学問上の関心は戦前の学者達ともはや全く異なったものとなっている。また国交回復と

ともに、インドネシアからの留学生の数も急激に増加しつつあるが、これは英語よりオランダ語のほうに年期を入れてきた30才以上の世代が多い一方、革命後の学生生活を経てきた世代にとっては、むしろオランダ語は英語よりむつかしいと感じられているらしい。

ライデン大学によって、またそこに依然として健在の C.C. Berg, Th. Pigeaud その他の諸教授によって代表される戦前のインドネシア研究は、遂にオランダ人の後継者を得ないように思われる。それが植民国家の利害などに煩わされぬ、世界的水準の学問であったことを知るだけに、このような事態は惜しんでもあまりあるが、今後オランダに起こるべきインドネシア研究はその空白を補うものとなるであろう。 (1967年10月8日)